

氏名 井ノ口 淳三
 学位(専攻分野) 博士 (教育学)
 学位記番号 論教博第91号
 学位授与の日付 平成12年3月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 コメニウス教育学の研究

論文調査委員 (主査) 教授 山崎高哉 助教授 鈴木晶子 教授 天野正輝

論文内容の要旨

本論文は、コメニウス (Comenius, チェコ語名 Jan Amos Komensky, 1592-1670) の教育学を貫く基本命題である「すべての人にすべての事柄を教授すること」が彼においていかなる経過を辿って芽生え、発展させられ、いかなる教育目的、内容、方法を包括する理論として構築されたのか、またそれが彼の時代とその後の時代にどのような影響を及ぼすことになったのかを明らかにしたものである。本論文は、序章と4部15章から構成されている。

序章「日本におけるコメニウス研究の成果と課題」において、論者は、初めに日本におけるコメニウス研究の歴史を振り返り、それを四つの時期、すなわち1957年以前の前史的な第1期、1957年から1969年までの第2期、1970年から1991年までの第3期、そして1992年以降の第4期に区分した上で、それぞれの時期の特徴を明らかにしている。今日、日本におけるコメニウス研究は、研究者の増加とともに、彼らの共同研究体制が築かれつつあり、論者は、そこに日本のコメニウス研究の今後の発展の可能性を見ている。

第1部「すべての人に」では、「すべての人にすべての事柄を教授する」というコメニウスの基本命題のうち、「すべての人に」という教育目的と対象に関連する理念が検討される。

第1章において、論者は、コメニウスの初期の代表作『地上の迷宮と魂の楽園』(1623年執筆, 1631年出版)には「神の下での平等」という立場が明瞭に示されているにもかかわらず、「すべての人の教育の可能性」についての記述が見られない、つまり「すべての人の教育の可能性」という彼の主張は「神の下での平等」という立場と必ずしも最初から結びつくものではなかったことを指摘している。第2章では、「すべての人」という表現が貧富の差や身分、性別、居住地、年齢や民族にかかわらずなく、文字通り「すべての人」を意味することが論じられる。またコメニウスにあって、「すべての人の教育の可能性」という考え方が徐々に具体的な形を伴って芽生え、『大教授学』(1628-32年執筆, 1849年出版)に至って「すべての人への教育の必要性」の主張がその可能性の裏付けの上に理論化され、かつ統合されたことが指摘される。第3章と第4章においては、論者は、『大教授学』や『母親学校の指針』(1633年執筆, 出版)、コメニウスの晩年の著作『汎教育』(1650-55年執筆, 1960年出版)等に拠りながら、彼の幼児教育思想を検討し、彼が学齢にある子どもの学校教育から幼児教育を考え、さらに幼児教育から両親と大人の教育の必要へと思考を遡行させることによって、一種の生涯にわたる教育の構想に到達したことを明らかにしている。第5章では、コメニウスの生涯にわたる教育の構想が他の古典的な「生涯教育」論と区別される所以として、それが継続教育論の域にありながら、その範囲を超えて、学校教育を含めた全教育体系の再編成を視野に入れた展開を予想させることが挙げられ、しかもその展開が彼の汎知学、つまり「自然と人間と神についてのすべてを網羅する統一的普遍的な知識体系」の構築への努力と密接に関連していることが考察されている。

第II部「すべてのことを」では、コメニウスが「すべてのこと」の内容をどのようなものとして構想していたのか、またそれが、彼の汎知学の理念とどのようなかかわりがあるのか、彼の執筆した教科書の分析を通して明らかにされる。

第6章で、論者は、コメニウスの教科書執筆の軌跡を辿り、彼の教科書に取り組む意図と意欲が時期によって変化しており、しかも、その変化は彼の汎知学への関心の深まりとその研究の進展に伴って生じたことを、彼の最初のラテン語教科書『開かれた言語の扉』(1629-31年執筆, 1631年出版、以下『言語の扉』と略記)の分析によって明らかにしている。第7章

では、『言語の扉』の入門編として書かれた『開かれた言語の前庭』(1633年執筆, 出版)の分析から, 論者は, それが事物を精選し, それを系統的に学習することに配慮した『言語の扉』の改訂版であると同時に, 『言語の扉』よりも言語学習に重点を置いた側面が見られることを指摘している。コメニウスの教科書には語彙への配慮と事物の網羅という二つの側面があり, また彼の「汎知学」には百科全書の影響を色濃く残した概念と抽象度の高い概念という二つの概念があるが, 第8章では, この二つの側面と二つの概念との関係が考察され, 彼の教科書も教授学の視点からだけでなく, 彼の汎知学の全体的枠組みの中で考察する必要があることが浮き彫りにされる。

第III部「教授学と汎知学の接点『世界図絵』」では, 教授学と汎知学が交差する接点に位置する, コメニウスの世界最初の絵入り教科書『世界図絵』(1653-54年執筆, 1658年出版)に焦点を当てて, 詳細に検討が加えられる。

第9章で, 論者は, 『世界図絵』に対する様々な評価, すなわち子どものための絵本, 視覚に訴える教科書, さらに「バラ十字団」の隠喩としての評価について綿密に検討したのち, 『世界図絵』の特別の意義は, それが彼の汎知学の全体像を具体的に示した著作であるところにあると指摘する。第10章では, 『世界図絵』の多くの異版本のうち, 特に後世への影響力の大きい英訳1777年版が, 第11章では, 「新『世界図絵』」あるいは『世界図絵』の「第II部」とでも呼ばれるべき, 『世界図絵』の形式は踏襲しているものの, 内容が全く異なる18世紀の作品がそれぞれ検討に付される。第12章では, 挿絵に特徴のある異版本を取り上げ, その相違を検討することにより, 『世界図絵』における挿絵のもつ意義が明らかにされる。

第IV部「教授の技法と教師」では, 『世界図絵』を初めとする教科書がどのような教室やいかなる教師によって教材として用いられたのかが考察の主題とされる。

第13章では, コメニウスの教授学上の三大著作である『教授学』(1628-32年執筆, 1849年出版), 『大教授学』, 『分析的教授学』(1643-47年執筆, 1649年出版)の内容が比較検討され, 彼の「クラス」に関する概念の展開過程が辿られる。第14章では, 彼のクラスがどのような規模と発展段階の学校で編成しようとされたのかが考察され, 論者は, コメニウスが「1学年1学級」を抱えるような大規模学校で「学年クラスの空間的独立」を構想し, 提唱したのではないかと推測している。最後に, 第15章では, コメニウスの諸著作から教師に関する論述を抽出し, その特質を考察するとともに, 彼の汎知学と教授学との相互関係が教師論の中にどのように現れているかを検討することによって, 彼の教師論の独自の意義が明らかにされている。

論文審査の結果の要旨

コメニウスは, ほぼ全ヨーロッパを巻き込み, 焦土と化した30年戦争(1618-1648)のさ中に生き, カトリックのハプスブルク家の支配下に置かれた彼の祖国(現在のチェコ共和国)から, プロテスタントであるが故に追われ, 亡命を余儀なくされた。しかし, 彼は, 流浪の生活の中にあって, 「人類の破滅を救うには青少年を正しく教育するより有効な道はほかにはない」と確信し, 教授学と汎知学関係の多くの著作を執筆するとともに, 請われて行方教育の改革の旅に明け暮れた。本論文は, 同時代と後世に多大の影響を与えたコメニウスの足跡と思想形成の歩みを綿密に辿り, 「すべての人にすべての事柄を教授する」という壮大な構想の生成・展開過程を手堅く跡づけた力作である。

本論文の何よりも大きな学問的価値は, 『世界図絵』について, その日本語訳を完成させた論者ならではの緻密な考察が展開されている点にある。『世界図絵』には, 子どものための絵本としての高い評価や画期的な挿絵入りの言語教科書としての名声と普及, さらに「バラ十字団」の隠喩が隠されているとの憶測もあり, 歴史上果たしてきたそれぞれの役割は貴重であるが, 論者は, それらの役割を検討した上で, 『世界図絵』の最も重要な意義は, それがコメニウスの二大基本思想である教授学と汎知学との「相互透入関係」ないし「相互包摂関係」を具体的に表現した著作であることにありと結論づけている。

『世界図絵』は, 「世界最初の絵入りの教科書」として歓迎され, 出版された翌年の1659年に早くも英訳本がロンドンで出版されるなど, コメニウスの生存中にすでに多くの異版本が出ている。もちろん, それは, 彼の没後にも数多く出版され続け, 初版出版後200年以上にわたって, 実際に教科書として使用されてもきた。その膨大な数にのぼる異版本のうち代表的なものに関して, 論者は, 書誌学的, 図像学的に丹念に分析し, コメニウスの『世界図絵』の初版本の特徴が異なる時代と場所でのどのように理解され, それにどのような内容を補う必要があると考えられたか, また教科書としてのあり方と役割がどのように考えられたかについて説得力のある論述を展開している。

次に, 本論文の優れた学問的価値は, コメニウスが執筆した教科書の内容分析とその性格の解明にある。論者は, コメニ

ウスの最初のラテン語教科書『言語の扉』が先行研究において、単に言語教授用の教科書としてではなく、汎知の事物学習を重視した汎知学関係の著作の系列に組み入れられることが主流になっているのに対して、それが言語教科書として果たした役割の大きさを再評価している。すなわち、論者は、『言語の扉』の分析を通して、コメニウスがこの書を「すべての人にわかりやすく」という教授学上の関心に基づき執筆し、主に語彙についての配慮を中心に「言語教授の簡略化」を試みたこと、しかし、「言語」か「事物」かという二者択一ではなく、言語と事物双方を学ぶことができることを目指し、それによってこの書には言語教科書としての性格（語彙への配慮という性格）と事物教科書としての性格（事物を網羅する性格）とが共存していることを明らかにしている。さらに、論者は、『言語の扉』以後のコメニウスの教科書には、世界の全体像を体系的なものとして把握する汎知学教科書としての『事物の扉』（1681年出版）へと向かう流れと、『言語の扉』の内容を対話形式にして劇の台本に仕上げた『遊戯学校』（1656年出版）や『言語の扉』に挿絵をつけて、これを再編した『世界図絵』へと向かう流れがあることを指摘している。このことは、上述のように、『言語の扉』には言語教科書と事物教科書双方の性格が共存していたこととともに、コメニウスが言語教授への関心から出発して、事物教授についても考えざるを得なくなったことを示唆している。

さらに、これまでの日本のコメニウス研究に見られない本論文の独創性について、2点指摘しておきたい。

その第一は、コメニウスの「すべての人にすべての事柄を教授する」という基本命題における「すべての人」に関して、論者が貧富、身分、性、居住地、民族のほか、とりわけ年齢の別なく教授するという点に着目し、コメニウスが学齢期の児童生徒ばかりではなく、幼児から、その両親と大人の教育に至るまで「生涯にわたる教育」を構想したことを明らかにしたことである。しかも、ここで特筆すべきは、これまでのコメニウスの幼児教育研究が彼の『大教授学』や『母親学校の指針』における記述の断片的な紹介に止まっているのに対して、本論文では、彼の幼児教育論が1630年代の著作である『大教授学』や『母親学校の指針』と、1657年以降に執筆されたと思われる晩年の著作『汎教育』との間でどのような変化があるか、また幼児教育の位置づけが彼の思想全体の発展の中でどのように変化したのか、またその原因は何かについて詳しく検討されていることである。この検討によって、『汎教育』において、教育対象年齢に関する記述が拡張され、幼児期の年齢区分もより詳細になるとともに、壮年期及び老年期の人も教育を必要とする「すべての人」の中に含まれるようになることが解明され、コメニウスにおける「すべての人」の概念の深まりが浮き彫りにされている。

第二は、先行研究で検討されることのないコメニウスの「教師論」が考察されている点である。論者によれば、コメニウスは、初め「人よりも方法」に重点を置き、教師の教授法上の学識と能力を重視していたが、やがて、そのみならず、教師に「あらゆる事柄の生きた実例、あるいは生きた原型としての普遍的な人間性」をも要請するようになったという。ここに、教授法に収斂されない教師論の成立を見て取ることができる。

本論文は、以上述べたごとく、学問的に高く評価できる点が多々あるのであるが、しかし、問題点がないわけではない。例えば、論者は、コメニウス教育学の全体像を描くと言いながら、彼の晩年の大作『人間に関する事柄の改善についての人類あての総勧告』（1645-60年頃執筆、1966年出版）には十分論究していない。また概念の時代性や概念相互間の関係・区別並びに当時の学校や使用されていた教科書の実態や歴史的背景に関する考察に厳密さが欠けている箇所が何箇所か認められる。しかし、これらの問題点は、論者の今後のさらなる研究によって解決されるべき課題であり、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成11年11月12日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。